

『日本美術年鑑』と展覧会カタログ

田中 淳

東京文化財研究所から、毎年一冊刊行される『日本美術年鑑』の巻頭の序文は、もとより所長名によるものですが、ここ 10 年ほどは、わたしが原文を書いて、所長に上げ、所長自身による赤字が入って決定稿となり、入稿されています。今年度のわたしの文案は下記のようなものでした。

序

『日本美術年鑑』は、わが国美術界の一年間の動向を、基本となる資料を収集整理してまとめたもので、昭和 11 (1936) 年に当研究所美術部 (平成 19 年 4 月 1 日付で企画情報部に統合) の前身である帝国美術院附属美術研究所によって第一冊が刊行されました。この出版事業は、昭和 27 (1952) 年に美術研究所が東京国立文化財研究所になり、さらに平成 13 (2001) 年 4 月、独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所と改められ、つづいて平成 19 (2007) 年 4 月には独立行政法人国立博物館と統合し、新たに独立行政法人国立文化財機構が設置されても変わることなく受けつがれています。今回は、その第 64 冊目となります。

この平成 19 年版は、平成 18 年 (2006 年 1 月～12 月) における美術界の動向を、年史・展覧会・文献目録・物故者の四項目に分けて編集しています。これらの記述の方法は、創刊以来の基本的方針を継承していますが、美術界の活動が多様化し、博物館・美術館が増加した今日にあっては、各項目とも調査・採録すべき事項が急増しているため、各項目の内容は厳選せざるを得ないのが現状です。そのため、平成 14 年には、情報の一層の精選をすすめるとともに、分類と内容を再精査して一部構成を改めましたが、今回も、それを継承しました。

ところで、昨年後半から起こった世界を覆う経済的な不況のなか、過剰なグローバルゼーションへの反省から、それぞれの国、地域の固有の伝統文化を見直そうとする動きがはじまっています。もとよりわが国の場合は、幸いにも世界に誇るべき文化財、及び美術作品が、膨大に保存され、また日々研究が深められつつあります。その文化財研究の基礎資料のひとつが、本年鑑であるといえます。文化財に関わる過去と現在と未来をつなぐ資料としての本年鑑の価値は、まさにこの点にあり、今後ともますます活用されることを望ん

でいます。

なお、この年鑑の編集には、企画情報部近・現代視覚芸術研究室と同部文化形成研究室とが当たり、同部文化財アーカイブズ研究室の協力を得ました。資料を提供して下さった多くの方々、国公私立の美術館・博物館、大学等の研究教育機関、美術団体、画廊等の美術関係諸機関に対し、心からお礼申し上げます。

いかにも紋切り型のようなのですが、ここでは、継続的に刊行している組織自体の変遷、また情報を集め、編集してまとめていくにあたっての内容の変化にふれ、さらに僭越ながら必ずその年を総括するような一節をいれるように心がけています。今回の発表では、わたしがこの編集にたずさわるようになってからの14年間、その間の『日本美術年鑑』の内容の変化について発表します。とりわけこのシンポジウムのテーマとなっている「展覧会カタログ」が、どのようにこの年鑑のなかであつかわれてきたかを中心に発表します。

もとより『日本美術年鑑』は、基本的に美術、文化財に関する文献情報の集成です。当該年に刊行された定期刊行物の文献情報を中心に分類編集し掲載するのですが、「展覧会カタログ」に掲載された論文等のテキストが、文献情報として「定期刊行物」とは別に、「美術展覧会図録所載文献」として独立して扱われるようになったのが、平成12年版(2000)からのことです。ではそれまでは、「展覧会カタログ」の情報は、どのように年鑑のなかであつかわれてきたのか、またその後から現在まで、「美術展覧会図録所載文献」の項では、どのような問題が生じているかを報告します。

略歴：

田中 淳(たなか あつし)

1955年 東京生まれ

1983年 東京芸術大学大学院修士課程修了

同年 東京国立近代美術館に勤務

1994年 東京国立文化財研究所に異動

現在 国立文化財機構 東京文化財研究所企画情報部長